

が認められた。E T 2 回投与例について各因子の変動は以下の如くであった。W B C の E T 投与直後の急激な減少、それに続く回復あるいは増加、血小板の減少、fibrinogen の増加、F. X の減少と F. X a, thrombin 活性の出現、plasminogen の減少と plasmin 活性、F D P の出現、prekallikrein の著しい減少と kallikrein 活性の出現、C₃-proactivator, C₃c, C₄ の急激な減少と続く回復、A T III, plasmin inhibitor の変動などである。また E T 連続投与例については凝固系各因子の著しい減少並びに上記各因子の顕著な変動が観察された。また病理組織学的検索の結果、肺、脾等の微細血管に多数の血栓の形成が観察された。

(総括) E T による shock 時、凝固、線溶、キニン生成、補体系の総合的変動が認められ、D I C 発現に Haeman 因子の関与が示唆された。

心室内伝導障害の実験的研究

外山淳治・小栗 孟・豊島英昭
太田寿城・大野三良・河辺達夫
(名大・環研)

我々はヒトの左脚前枝ブロックの成因を研究するために、イヌの左脚前枝切断実験を行ってきたが、明確な結論が得られなかった。この理由の1つとしてヒトとイヌとの解剖学的な差異が考えられた。そこでイヌよりヒトに体型が似ているサルを対象として再実験を試みた。

〔対象及び方法〕 ニホンザル 3 頭をペントバルビタールを用いて麻酔し、人工呼吸下で、コントロールの標準12誘導心電図(心電図)と体表面心臓電位図(電位図)を記録した。胸骨正中切開にて開胸後、コントロールの心外膜面興奮伝播過程を調べた。次に左房あるいは心尖よりナイフを挿入して左脚前枝を切断し、切断後の心外膜面興奮伝播過程を調べた。開胸後吸引を行いながら切断後の心電図及び電位図を記録した。電位図の作成は従来の方法に従った。実験終了後に心臓を摘出し、肉眼的に切断部位を観察した。

〔結果及び考察〕 ニホンザルの左脚前枝は扇状に広がっており、これらを前枝と後枝の2本にわけるのは困難であった。しかし、心室中隔左室心内膜面の前半分の前枝は全例においてほとんど切断されていた。

切断後に心電図では I 誘導で Q 波が出現し、Q R S 時間が平均 10 msec 延長し、Q R S 電気軸は平均 45 度左方へ偏位した。心外膜面の興奮伝播過程は切断後左室前側壁の広い範囲で約 10 msec の遅延を示したが他の部位の興奮伝播過程には著明な変化は生じなかった。切断後の電位図では、1) 心室興奮中期以後にみられる胸壁下部全体の負領域と、2) 心室興奮後期にみられる左前胸部の正領域が特徴的な所見であった。

切断後の電位図は、器質的心疾患を有し、左軸偏位を呈する臨床例のそれとよく似ていた。従ってこれらの症例に認められる左軸偏位の原因の1つとして左脚前枝の障害による左室前側壁の興奮の遅延が考えられた。

アフリカン・ハンター・ギャザラーの生態ならびに社会構造についての比較研究と総括

伊谷純一郎・市川光雄・寺島秀明
(京大・理)
原子令三(明治大・経営)
丹野 正 (東大・理)

我々は、今日までに、カラハリのブッシュマン、ザイールのムブティ・ピグミー、ムボテ、ウガンダのトゥワ、タンザニアのハッザ、ケニアのンドロボーなど、アフリカの代表的な狩猟採集民のすべてについて調査を進めてきた。これらの狩猟採集民は、半砂漠、熱帯降雨林、乾燥疎開林、山地林、アカシア、サヴァンナと、アフリカの主要な植生帯のすべてを覆っており、各々の自然環境に適応した多様な狩猟採集生活を営んでいる。これまでに集積された資料にもとづいて、2 回の研究会をおこない、生態および社会構造の両面からアフリカの狩猟採集民の比較研究を試み、あわせてホミニゼーションへの理論化の問題を模索した。

比較研究のために設定し、議論された重点項目は次のとおりである。1. 自然環境、2. 人間(周辺部族との関係を含む)、3. 狩猟と採集の対象、4. サブシステム・パターン、5. 物質文化(住居を含む)、6. 狩猟採集の方法、アクティビティ、労働時間とその効率、7. 食生活(栄養価、食物規制などを含む)、8. 社会組織(バンドのレンジ、社会構造、社会的相互作用等の社会行動など)、9. デモグラフィ、10. ライフ・ヒストリー、11. 自然認知の体系、12. 儀礼などの象徴的行為、など。